

秋葉街道案内資料Ⅳ

「掛川から森・三倉・犬居・秋葉山へ」



○秋葉山と秋葉信仰

現在、秋葉山には、山頂近くに「秋葉山本宮秋葉神社」の上社があり、山頂より少し下った杉平に「曹洞宗秋葉山秋葉寺」があって、信仰の山としてその両輪を形作っている。それぞれ発行している縁起には、明治の初めに至る解釈に異なるところがある。

秋葉寺は、「秋葉寺略縁起」によると、行基が秋葉山山頂に聖観世音菩薩を本尊とする大登山霊雲院を創建し、その後、三尺坊大権現の出現により「秋葉山秋葉寺」と改められたという。「秋葉山略縁起」(寛政3年の写し)では、「大登山秋葉寺」となっている。

平安時代から鎌倉時代を通じて発達した修験道の霊場の一つとして、三尺坊により秋葉修験の基礎が据えられ、守護神となったことにより三尺坊の霊験への信仰が高まったと推定される。

江戸時代中期以降、三尺坊大権現の火防の神としての信仰が急速に広まり、講の組織が全国的に作られるようになった。そして、お札を受けるために秋葉道者となって代参をした。また、村の辻には秋葉山常夜灯やその鞘堂(浜松市浜北区付近では「龍燈」と言う。)が建てられるようになった。

明治時代になり、神仏分離政策により秋葉寺は廃寺となり、諸仏や仏具は、一時、本寺である曹洞宗可睡斎(袋井市)に移された。その後可睡斎には秋葉総本殿に三尺坊大権現(本体)が祀られ、また明治13年に秋葉山秋葉寺が現在地に再興されて三尺坊大権現(分体)が祀られ、それぞれ信仰されている。

秋葉神社は、ほのかぐつちのおおかみ略縁起によると、秋葉山には往古「火之加具土大神」を祭神とする「あまはりのかみの岐陸保神社」があり、中世には秋葉大権現と称していたが、明治の神仏分離により「秋葉神社」と称するようになったという。さらに昭和27年「秋葉山本宮秋葉神社」と改称され、火防開運の神として信仰されている。

○秋葉街道と塩の道

秋葉街道は、江戸時代は「秋葉道」と呼び、幾筋もの道がある。特に代表的なものとしては、関東方面からは、東海道を西に向かい、掛川宿から分岐して、森、三倉、犬居を経て秋葉山を目指す。関西からは、東海道を東に向かい、浜松宿から鹿島を経て秋葉山に向かった。また、御油から姫街道を東

に向かう道筋、御油から鳳来寺に詣り、秋葉山へ向かう道筋もあった。

本案内資料の道筋である掛川から秋葉山までの里程は、江戸時代後期の「秋葉山参詣道法図」(嘉永3年)では「九里余」である。

掛川から秋葉山への信仰の道は、また「**塩の道**」といわれる物資交易のルートとして重要な役割を果たした。相良街道を経由して運ばれた塩や魚などは、掛川で取引されると、問屋商人たちによって北遠経由で信州方面に運ばれた。信州に通じる道として「信州街道」とも言われていた。

○掲載地図について

本案内資料では、秋葉街道の道筋を、大日本帝国陸地測量部が測図した明治23年の地図、参考文献などを参考にしたり現地を歩いたりして調査し、現在の地図上に表した。地図は、「**国土地理院の電子地形図(タイル)**」を使用した。

秋葉街道の道筋  消滅または不通の道筋 
迂回路 

○参考文献等

静岡県歴史の道 秋葉街道	静岡県教育委員会
信仰の道 秋葉街道	田中元二
図説 森町史	森町
北遠の城	天竜区魅力ある区づくり事業実行委員会
秘境はるか塩の道秋葉街道	有賀 競・野中賢三
塩の道今昔物語	小林佳弘
塩の道ウォーキング	静岡新聞社
天竜川と秋葉街道	神谷昌志
秋葉山三尺坊大権現	野崎正幸
掛川誌稿	斎田茂先
その他、各地のパフレット・現地の説明板などを参考にした。	

作成	平成30年2月3日	浜松市浜北区寺島816	太田隆雄
		TEL:	053-587-3063
		Email:	wbs15437@mail.wbs.ne.jp

三倉へ



*上の道筋 **—** には、現在通行不能になった部分も含んでいる。



掛川宿を西に東海道を進み、倉真川の大池橋を渡ると秋葉神社がある。この地点が秋葉街道の入り口となる。

1 秋葉神社

安永9(1780)年、江戸日本橋の豪商次郎兵衛より青銅製の鳥居が寄進された。秋葉街道一の鳥居と言われ、歌川広重の「東海道五十三次」にも描かれている。嘉永7年の大地震により倒壊して建て替え、明治24年に掛川森往還道の開通に伴い移転し、昭和8年に道路拡幅により撤去された。徳川慶喜揮毫の額「正一位秋葉神社」が残されている。



秋葉神社もその位置を変え、現在は平成21年に「掛川遙拝所」として社殿を改築し、木造の鳥居が建てられている

鳥居前には、自然石の道標が設置されている。「右 あきは道 大池村」と刻まれている。

秋葉街道は、現在の秋葉神社の裏側を通っている細道である。田の中を通り、源ヶ谷池の手前で、国道一号線により分断されている。

国道を越えるとすぐ右手に旧道が残っている。



右手の新しく造成された「秋葉路」住宅地の入り口に設置された秋葉常夜燈がある。「平成2年12月建設秋葉路」「作 合葉武」とある。クスの大木は、「秋葉路」にあったものを移植したという。



大池と新田とを連絡する「中坂の切割」(新田の切通し)があり、江戸時代にはすでに開かれていた。道路の西側部分が旧道である。



2 道標

新田の広い道路から左手(西)の細道に入ると、2軒目の山本家の庭の東に道標がある。

「左 あきは道」「右 垂木□□」「即位記念 大正十四年十一月」と刻まれる。山本氏によると、山本宅の北側を斜めに通っていた秋葉街道にあったという。

また、もう一基が山本宅より西の道路脇に自然石の道標がある。「みぎ あきはみち」

「左 村みち」と刻まれている。これも北側の秋葉街道にあったものという。



西の十二所神社入り口の脇に、現代の「塩の道」案内表示が建てられている。秋葉街道は、石橋を渡って小津根に向かう。



石橋を渡り，下垂木の小津根に至る。

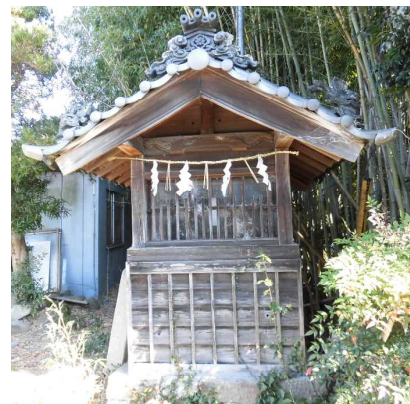
3 秋葉山常夜燈

形状が特異な常夜燈で，金銅製の宝珠笠の火袋がのる。明治期の建立であろう。常夜燈はもと小津根橋東の交差点北側にあった。竿部は六角形状のコンクリートであったが，南への移転により新しく木造になっている。



4 六地藏

四辻の脇にある六地藏で「天保十〇年」と隅に刻まれている。正面左上が欠損している。風化が激しく，地藏の姿は何とか分かる。今も花が手向けられている。



6 道標

花崗岩製の道標で，秋葉山常夜燈に立てかけられた状態で置かれている。やや摩滅しているが，表面に「左 あきは道」，左側に建立したと思われる人名が刻まれている。北側の曲り角付近にあったのではないと思われる。



秋葉街道は，北側の辻で左に曲がり，海老田橋を渡って家代川に沿って北に向かう。江津橋を渡り，福来寺前から郷ヶ峰に向かう道筋と，江津橋を渡らず北へ進み，遊家を通る道筋もある。

本資料では，江戸時代に主に使われた郷ヶ峰を通る道筋を案内する。

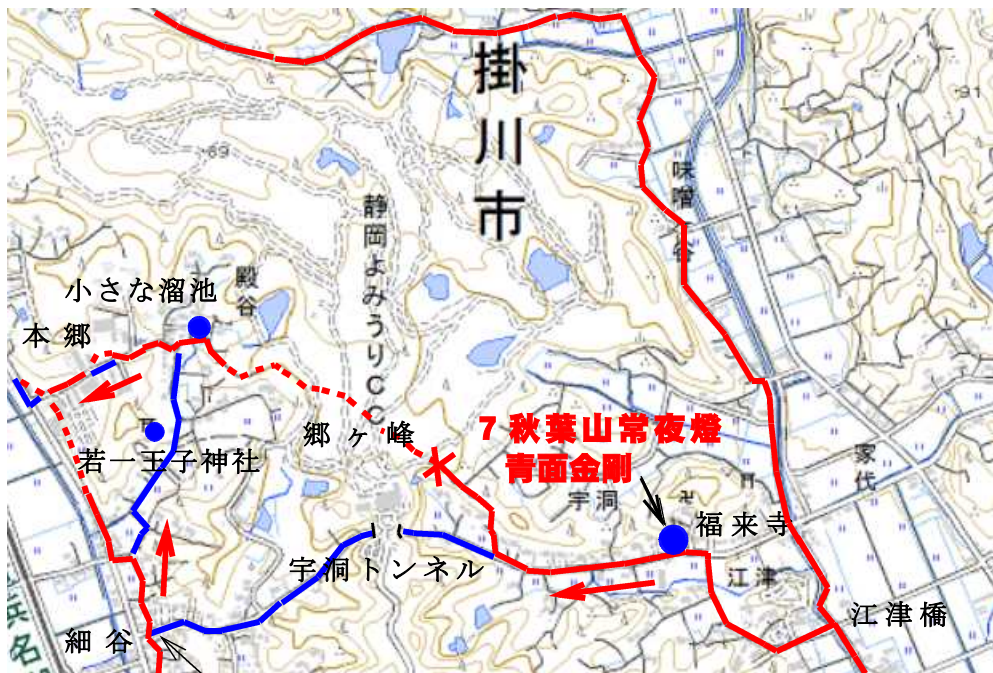


○ 福来寺 (地図P3)

鈴(冷)陽山福来寺は曹洞宗の寺院で本尊は釈迦如来である。

天文3年(1534)村内に疫病が流行り病氣平癒のため，永江院四世雪窓鳳積大和尚は，御夢窓と呼ばれる夢の中に現われた九つのお灸により病を治め，その後一寺を建立し福来寺と号した。災い転じて福が来るとい言葉が由来であると伝えられる。この靈驗あらたかな九つ

のお灸は，後の世にも伝えられた。



迂回路は、南の富部から来る秋葉街道と合流する。
 少し南の細谷公会堂の脇に、大型の秋葉山常夜燈がある。
 (昭和6年建立)

7 秋葉山常夜燈・青面金剛像

瓦葺きの常夜燈鞘堂で、中に鉄製の火袋が置かれている。高さ30cm、径35cm。この火袋は江戸時代に大池秋葉鳥居脇にあった秋葉常夜燈によく類似しているという。少し前には福来寺境内に置かれていたが、この鞘堂に戻っている。

また、鞘堂の西脇には、青面金剛(庚申)の石像がある。
 東脇には、現代の「塩の道」案内表示が建てられている。



福来寺前を西に進むと、右手に郷ヶ峰を通る秋葉街道の細道があるが、この道の坂を上がると、ゴルフ場のフェンスにぶつかり、不通とな

っている。

迂回路は広い道の坂を上って進み、宇洞トンネルをくぐり、細谷に下る。
 そして細道を北へ進み、若一王子神社前を通り、小さな溜池付近の街道に出て本郷の県道方面へ下る。



下って県道を北へ200m程進み、県道から離れて右手の細道の街道に入り、また北へ向かう。山沿いの細道の街道が長福寺前まで続く。
 途中、遊家を通る秋葉街道が合流する。



8 道標・秋葉山常夜燈

秋葉街道の長福寺参道入り口の左角に、四角柱の道標がある。正面に「ひだり あきは道」、右側に「為父母報恩」、左側に「文政十一年戊子春三月建之 志以」(1828)と刻まれる。

参道の西側に秋葉山常夜燈がある。石組みの基礎に瓦葺き屋根の重厚な鞘堂である。高さが約280cmある。木製の火袋が置かれている。もとは本郷郵便局南方50m付近の道にあったが、県道工事のため本郷西区公会堂脇に移転し、さらに現在地に移転した。



9 長福寺

安里山長福寺は神亀3年、行基菩薩の開創という。以後真言宗・天台宗を経たが、明応3年兵火により焼失。原氏12代頼景の寄進により再建。以後曹洞宗の寺院となった。本尊は聖観世音菩薩。

「空を飛んだ釣鐘伝説」がある。千年の昔、長福寺に訪れた旅の僧が釣鐘を金剛杖に掛けて空へ飛び去り、大峰山山上まで持ち去ったという。今でも大峰山には

長福寺の名がある釣鐘(国重要文化財)がある。その銘文には「遠江国佐野郡原田郷長福寺鐘 天慶七年六月二日作之」(944)とあるという。

旅の僧は役行者の化身であるとして、本堂背後の行者山の行者堂に修験道の開祖役行者を祀っている。毎年、役行者尊祭典が行われる。

山門近くには、曾我兄弟の弟時致の供養塔と伝えられる宝篋印塔がある。

長福寺一帯は原氏の本郷城跡とされているが、遺構は確認できない。

10 長福寺古墳

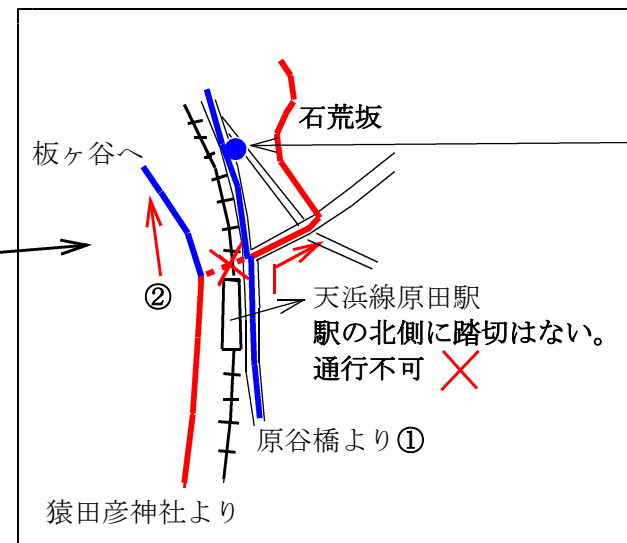
長福寺の背後に、長福寺古墳群3基があり、1号墳が残っている。古墳時代後期(6世紀中頃)の円墳で、径約20m。横穴式石室の奥壁と側壁の一部が残っている。傍らに天井石が並べられている。

金銅装太刀、須恵器、装身具などの出土品は長福寺本堂に展示されている。



長福寺入り口から西へ下り、県道と旧道を渡り、北(右手)の線路沿いに渡し場へ向かうが、道は消滅している。北の原谷橋へ迂回し、坂を登って秋葉街道へ出る。秋葉街道は猿田彦神社標を右手に下り、天浜線の踏切を渡って、猿田彦神社に向かう。(渡場方面へも堤防まで向かうことができる。)

11 秋葉山常夜燈 (次ページに記載)



道標

自然石に
「右 掛川 左 原田村
大尾山 幡鎌青年團」
と刻まれる。

猿田彦神社の前に現代の「塩の道」案内表示が建てられている。ここから天浜線に沿いながら坂を下ると原田駅があるが、踏切がなく、秋葉街道の石荒坂には行けない。

①石荒坂に行く場合は、原谷橋の所に戻り、北へ迂回路に行く。

秋葉街道の石荒坂を登ると茶畑にでる。見晴らしがよい。さらに進むと林の中は途中からブッシュがあり、通行不能となっている。(林の先の茶畑からは一部街道が残っている。)

迂回路の県道に戻り、北に進む。

②石荒坂に行かない場合は、そのまま板ヶ谷へ迂回する

1.1 秋葉山常夜燈 (前ページ地図)

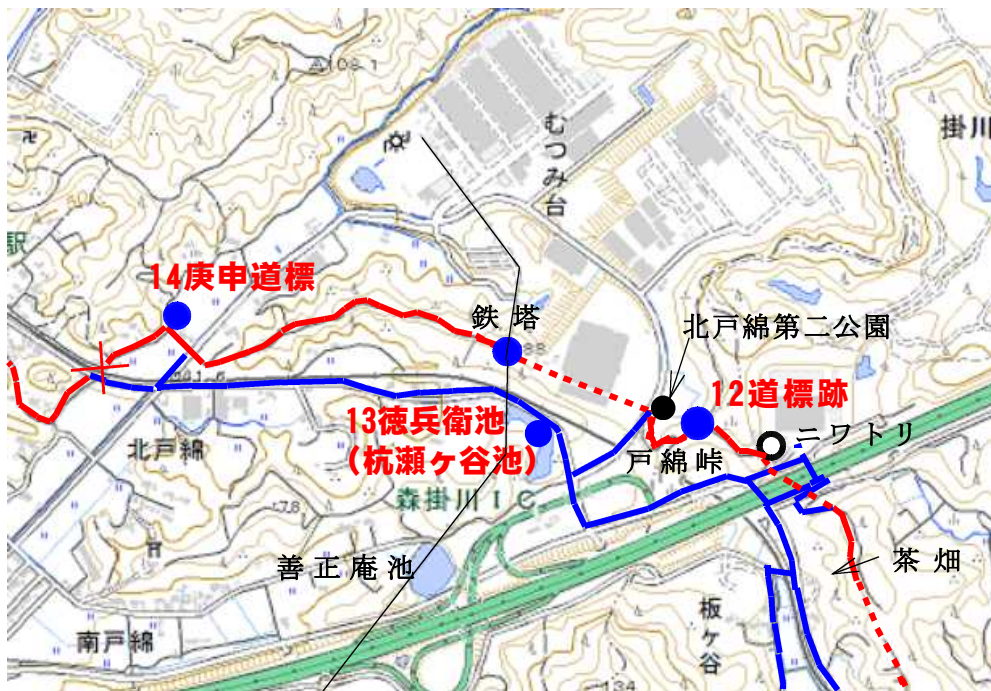
最福寺門前に秋葉山常夜燈がある。瓦葺き木造の鞘堂で、石組みの基礎はない。一部破損しているが、堂内に重厚な屋根をもつ木製の常夜燈が建てられている。



最福寺門前の角に道標がある。自然石に「右 森 向後 西山□□道 幡鎌青年團」と刻まれる。道標の上の壇に石のカエルが置かれている。

門前の道路を東に行くと、公会堂前にも幡鎌青年團が建立した自然石の道標がある。「右 森 左 掛川道」と刻まれる。もとは秋葉街道の辻にあったと思われる。





石荒坂から進んだ林の中のブッシュ（通行不能）の先には茶畑があり，そこから一部街道が残っている。その先は第二東名高速道路により消滅している。

高速道路の北側に「ニワトリのオブジェ」○のある会社の入り口付近から戸綿峠に向かう道があり，また峠から茶畑の北側を下る道がある。下りの切り通しに倒木などがあり，注意が必要。下った所に北戸綿第二公園の駐車場・トイレがある。その先は会社の敷地になり，鉄塔まで消滅している。

迂回路は徳兵衛池（杭瀬ヶ谷池）の北側を進む。

1 2 道標

かつて自然石の道標が戸綿峠に置かれていたが，現在は掛川城内の掛川御殿の庭に移されている。

右面に「右 かけ川道」，左面に「左 順礼道」と刻まれている。秋葉山を回る順礼たちへの案内となっている。

戸綿峠には，茶屋もあったという。



掛川城内の道標

1 3 徳兵衛池（杭瀬ヶ谷池）

徳兵衛池と呼ばれるいわれがある。森町に住む徳兵衛という若者が，掛川宿に行った帰り路，戸綿峠で美女に出会い，誘われて1軒の家に入って行くと，鏡に向かっていた女が急に後ろを振り向いて，お歯黒をむき出し，「ついたかえ，徳兵衛さん」と言ってニヤリと笑った。こんな事を二度・三度と繰り返すので，余りの気味悪さに徳兵衛は次第に後ずさりして，とうとう池に落ちてしまった。朝がた，ここを通るとき，狐に石ころをぶっつけたので，その仕返しをされたのだと気づいた。その後，誰いうとなく，この池を徳兵衛池というようになったと，伝えられている。



鉄塔から茶畑の尾根を西に進む街道は，景色の良い場所である。



1 4 庚申道標

鉄塔からの尾根の街道を下り，北戸綿の公民館へ進む。公民館の北側駐車場の隅に，四角柱の庚申道標がある。かなり風化している。

「左 かけ川道」「宝暦十三年癸未」（1763）と刻まれる。現在，他の面は風化して判読できないが，「右 あきは」「庚申塔」と刻まれているという。

もとは，天浜線より南の道にあって，郷倉の敷石として使われていたのを発見し移転したという。

街道は，庚申道標のある公民館から南に進むが，天浜線に突き当たる。ここは踏切は無く，通行止めXである。東の踏切へ迂回する。



15 秋葉山常夜燈

道路の壁の上に灯籠がある。火袋は木製でトタン葺き屋根とコンクリートの竿になっている。森町指定文化財である。

戦前は瓦葺き木造の鞘堂があったが、戦後建て替えられた。

ここからしばらく昔のおもかげのある細道が続く。戸綿駅前になる手前で左折し、溝板の上を歩く細道を通り、県道に出る。



16 道標

元は街道と県道58号線の交差点脇に自然石の道標があった。かつてここから森町民俗資料館に保管されていたが、現在は次郎柿原木の入り口に移されている。道標の右上が欠損しているが、中央に「秋葉山道」「(右)袋井道 左掛川道」、裏に「世話人 森町 栄助」と刻まれている。江戸時代のものと推定される。



県道に出てから太田川の渡船場に向かう街道の細道があり、簡易老人憩いの家の西に水準点がある。迂回は堤防上を森川橋に向かう。



17 金守神社

地元では「金比羅さん」と呼ばれている。11月に行われる森の宮山にある三島神社の祭礼で、神輿渡御の御旅所となる。

境内には樹齢数百年の楠があり、この楠を藤の木が巻き付いて、藤の花の季節には楠全体が

藤の花で覆われ、「十七夜の大藤」といわれている。

この神社には木喰上人の扁額がある。また、一返舎半九著「秋葉街道似多栗毛」を蔵している。江戸時代の道中と旅籠や街道の景観の手がかりが記載されている。

18 次郎柿原木

弘化年間(1844~47)に森町五軒町の松本治郎という人が、太田川原で柿の幼木を拾い庭に植えたところ、成長し実をつけるようになった。明治3年に火災のため焼失したが、幸いに翌年焼け残った根株から発芽して成長し、再び実をつけるようになった。この実は肉質が緻密で豊かな甘みがあり、種も少ないことから良品質が認められて評判になった。人は治郎の名をとってジンロウ柿というようになった。明治33年頃には「次郎柿」に定着した。(県指定天然記念物)



19 秋葉山道標

森川橋の北側たもとに建てられている。正面に「もりまち」、左面に「秋葉道口里十口」(三里か)、右面に「ひだり 秋葉神社 秋葉三尺坊 大洞院 本道」、裏面に「江戸建立講中」と刻まれている。掛川から三里目にあたる道標で、もと太田川渡船場付近に建てられていたと思われる。

道標の北側には、大正4年御即位記念として「正一位秋葉神社道」の大きな石柱や「森町之賦」の石碑が建つ。





20 町立歴史民俗資料館

この建物は、明治18年周智郡役所として、現在の森小学校南側に創設されたものである。郡制は明治12年に施行されたが、庁舎ができるまでは本町の西光寺や明治町の梅林院が庁舎として充てられていた。大正15年郡制廃止後は、保健所や役場などに転用されたが、昭和49年現在地に移築された。昭和54年より歴史民俗資料館として使われている。



21 蓮華寺

八形山蓮華寺は、慶雲元(704)年文武天皇の勅願により行基菩薩が開創した森町で最も古い寺である。法相宗の東海の本山としての寺歴を持つ。天長8(831)年、慈覚大師円仁が天台宗に改め、中興の祖となる。この地方の文化の中心地として隆盛を極めた。蓮華寺は、いろいろな萩の花が咲く「萩の寺」と言われる。



文化財記念館には、県指定文化財など所蔵されている。また、寛政12年(1800)83歳の木喰上人が一晩で彫ったという子安地藏尊像がある。

西には八形山への歴史の道があり、黄金塚・禅勝坊塚などがある。

桜御前の伝説がある。850年ほどの昔、鳥羽上皇の後に仕えたという藤原頼長の娘(桜姫)は、宮中一の才色兼備で藤原成範との間に小督の局をもうけたが、政変の難により諸国遍歴の末、遠州一宮の蓮華寺を頼って森小学校あたりに庵を結び、桜御前と称された。桜御前を偲ぶ陽光桜が植えられている。蓮華寺の境内には供養塔がある。



子安地藏尊



桜御前供養塔

22 秋葉山常夜燈

瓦葺きの鞘堂の中に「森町瓦」で作られた家形の常夜燈が木杭の上に据えられている。火袋の下に「秋葉山」「文化十」「癸酉年」(1813)と刻銘が見られる。現在は電球の明かりが付けられている。森町指定文化財。



傍らに宝暦年間の石仏や弘化3年(1848)の庚申塔がある。

23 桜御前旧跡の碑

このあたりに桜御前が庵を結んだとされる旧跡の碑がある。碑には「桜御前舊跡」と刻まれる。

説明の石碑によると、建てられたのは江戸時代と思われ、もう少し西北方に寄った所にあったが、後に現在地に移された。「遠江国風土記伝」には、「桜の御前塚 小御所 地名となる」と記されている。昔は塚があったようだ。

このあたりの「桜御前」の地名やここから本町へ至る「小御門小路」は桜御前に関わるものという。





森町村は秋葉街道の中核的な宿場で、人馬の継ぎ立て、北遠の茶・木材・椎茸などの集散地、六斎市（3と9の日）も開かれ、往還沿いは商家を連れ、旅籠屋も多かった。文政13年（1830）には24軒の旅籠屋があった。茶・古着の商いは全国的に名を知られていた。

街道は賑わい、俗語に「森の横町、なぜ日が照らぬ、秋葉道者の笠のかげ」と謡われていた。

24 商家大石屋

江戸後期の本町の町屋で、大石屋清兵衛を名乗る古着・茶・椎茸・炭などを扱う商家であった。屋敷内に5つの土蔵をもつ町内でも有数の商家で、母屋と共に当時の繁栄ぶりが重厚な造りによってうかがわれる。

大石家は文政8年（1825）に古着商いを始めた。小袖・羽織・布団や一般の古着だけでなく、諸宗派の袈裟なども扱っており、江戸や三陸方面にも広く販路を確保していた。



本町には日本製糖業の父といわれた鈴木藤三郎の生家がある。

街道は、本町から児童館前を左折して仲町に入る。三島神社のある三島山は、「森山」などと呼ばれ、森町の語源と言われている。三島山の下には、徳川家康から駿遠両国鑄物師惣大工職の朱印状を与えられた山田七郎左衛門家が屋敷を構え、近世を通じて駿遠両国の鑄物師を支配した。蓮華寺に石塔がある。

25 三島神社

三島山に鎮座する三島神社（祭神大山祇命）の創建は不明であるが、戦国期の兵火などによる焼失や再建を繰り返した。万治4年（1661）にも焼失し、現在の本殿は、寛文12年（1672）鑄物師山田七郎左衛門によって再建された。三間社、流造、銅板葺きであった。明治や大正に改築があったが、本殿の虹梁は当時の意匠を残す彫刻である。森町指定文化財。拝殿脇には、大祭に奉納する「石松囃子」を正しく保存・伝承しようと、昭和48年に3m余りの横笛が作られ奉納されている。



仲町の街道一本西の通りには、商家の蔵が並ぶ。

街道は仲町から枡形の横町に入り、新町へ進む。



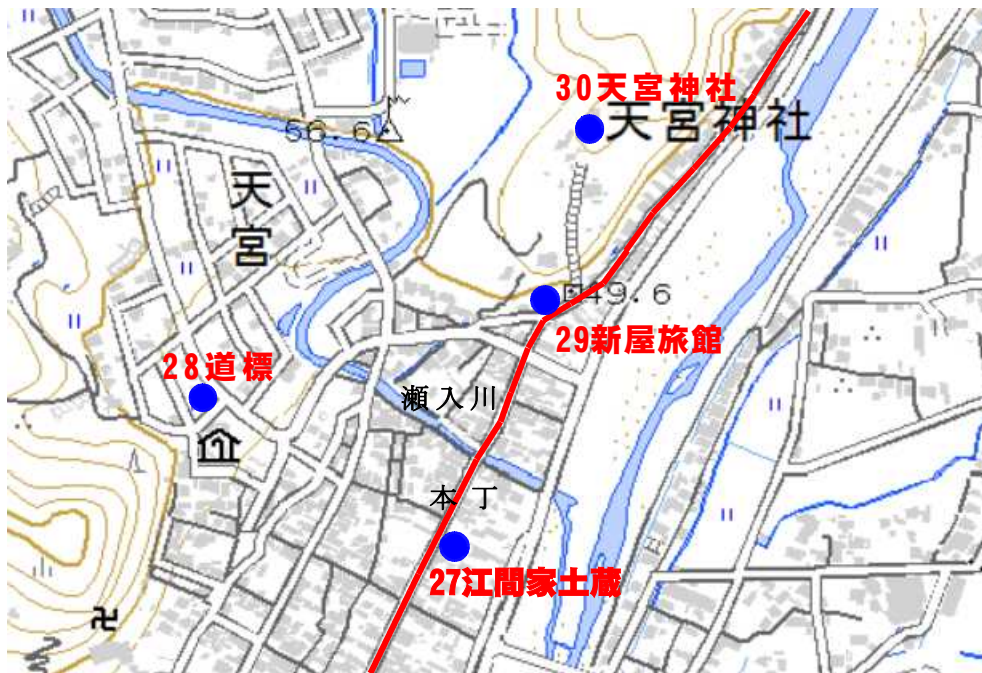
26 代官柚木家屋敷跡

森町村を支配した旗本土屋氏の代官柚木家の屋敷跡である。柚木家は、在地で登用された有力者（地代官）の一人である。代官の役目は、陣屋の御用金の負担、御蔵米の払い出し、年貢收取、年貢米の地払い、江戸屋敷への送金や連絡、財政運営、陣屋の賄い、知行地内の寺社への代参、村々の巡回と村役人の統括など、多岐にわたっている。

柚木家より進んだ北には、天保13年（1842）創業の北島靴店がある。

新町の街道一本西の通りには、商家の蔵が並んでいる。





27 江間家土蔵

新町から本丁へ進むと街道の右手奥に、明治25年建築の江間家の土蔵がある。天宮神社の代々の神主、中村左京家の分家の遺構で、鬼瓦には天宮神社の社紋が刻まれている。森町へ寄贈された。森町指定文化財。

新しく地元の材料を使った土塀が設置された。



28 道標

瀬入川に沿って北上し、大同院・本宮山・秋葉山に至る道沿いにあたる所、萬松寺口に道標がある。高さ90cm程の大きな自然石の表面に太い文字で「右 秋葉山 大同院」と刻まれる。

もう一基、少し小さな自然石の表面に「西国卅三所 観世音菩薩道」、裏面も文字らしきものがあるが、欠損が大きく判読不明である。



29 新屋旅館

新屋旅館は、安政2年(1855)建築の建物である。森の石松を4歳から7歳までの間育てた養家とされている。天宮神社の例大祭の時、迷子になっていた石松は、森の五郎に拾われ、今から7代前の新寅という人に育てられたと伝えられている。

旅館には石松の部屋があり、柱に刀傷が残っているという。



30 天宮神社

天宮神社は、慶雲2年(705)、欽明天皇の勅願所として社殿が造営され、筑紫国宗像神社の祭神を遷し祀ったのが始まりである。戦国時代を経て、天正15年(1589)に徳川家康によって本殿が復興した。今の社殿は、元禄10年(1697)五代将軍徳川綱吉の命により、大棟梁甲良豊前宗賀によって造営された。

遠江国の一宮は小国神社を中心として国家や遠江国の安泰を祈る使命を持ち、天宮はその一部を担う神社で太田川流域の穀倉地の豊作祈願は最も重要な祀りであった。

小国神社と天宮神社の両舞楽(左舞・右舞)も深い関係があった。天宮の舞楽は、延舞から獅子までの十二段からなり、国指定の重要無形民俗文化財である。

境内には御神木の樹齢1000年余といわれる「竹柏」(県天然記念物)がある。この葉を持てば災難よけ・夫婦和合のお守りになるという。境内の裏の奥に「くちなし池」があり、水神が祀られている。





城下に入ると、旧城下銀行の建物がある。もとは城下の「みなとや旅館」の前付近にあり、昭和26年頃移築したという。

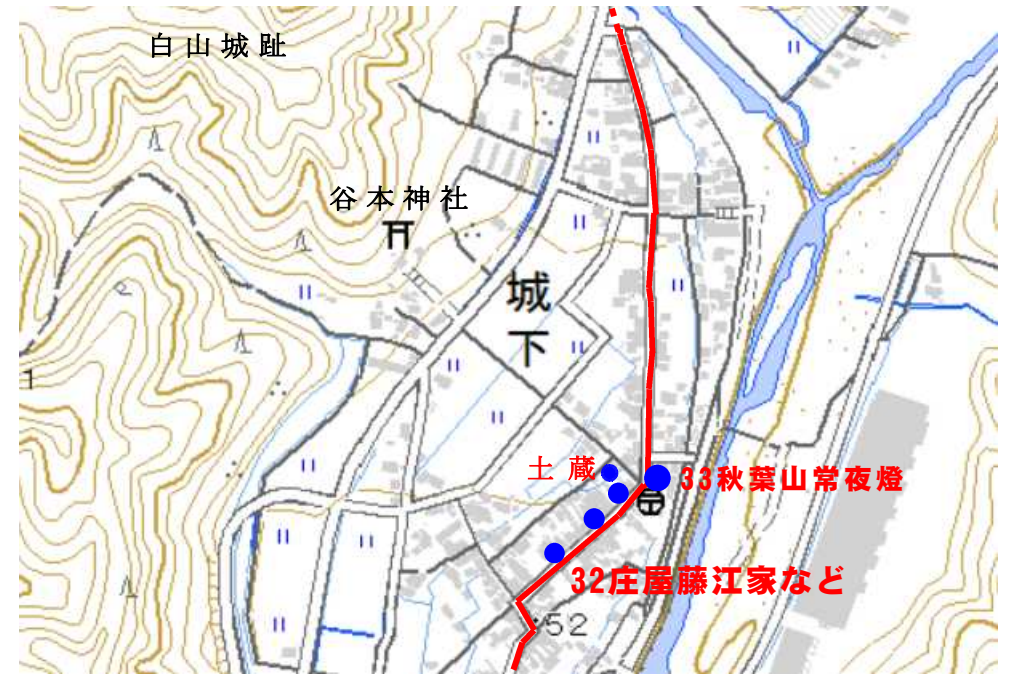
城下の地名は、天方三城の内、^{はくさん}白山城の麓の集落から名付けられたといわれる。城下村は江戸時代の初め、掛川藩の支配下にあり、のち横須賀藩に組み込まれて幕末に及んだ。



31 城下の町並み

城下の街道に沿った町並みは、家屋が道に対して斜めに構える建て方になっている。

城との関連から軍事的な役割を指摘する説があったが、実際は、自然堤防の町割りに合わせ屋敷取りをする場合、斜めの道沿いは隣の屋敷と少しずつずらして屋敷を作らざるを得なかったのではないかと。元々、城下の集落は、谷本神社の山腹にあったが、森町村や天宮村が町割りされた頃、現在地に町割り移転したとみられる。



32 庄屋藤江家など

火の見やぐらのある枡形の角を左折・右折すると、庄屋藤江喜重家・入船亭みなとや旅館・庄屋藤江金兵衛家など、江戸時代のおもかげを今に伝えている。藤江喜重家は、文久3年(1863)に再建され、その後修理や改造が行われているが、しとみ戸は、当時のままである。戦前まで醸造業を営んでいた。藤江金兵衛家は米穀商を営んでいた。一本西の道には商家の蔵が並んでいる。



庄屋藤江喜重家



入船亭みなとや旅館



庄屋藤江金兵衛家

33 秋葉山常夜燈 (次ページへ)



33 秋葉山常夜燈

瓦葺き切妻造り屋根の鞘堂と鉄製の燭台が立派な常夜燈である。高さ160cmの燭台の脚部に、天保4年癸巳(1833)名主 藤江喜十郎ら11



名が世話人となり、森町鋳物師 岡部五良左エ門藤原義金が製作したと記されている。

もとは北50mほどの所に建てられていた。
(森町指定文化財)

34 旧城下学校 (森町指定文化財)

明治14年3月、森町小学校の城下分校として新築され、その後城下学校となった。明治19年に森町・城下・天宮が合併し周智郡立森町高等小学校となった時、分教場として存続した。その後、報徳館となり、戦後、



城下桜幼稚園を経て、城下老人憩いの家として使用されている。

35 城下延城橋 (別名潜り橋)

城下を起点に太田川の延城橋を渡り、大尾山頭光寺に至る3里の山道は蔓畝街道(大尾山街道)と呼ばれ、沿道の村々と城下との交易道路として、また大尾山への参道として賑わった。昭和の初め、沈下橋になったが、道路整備により蔓畝街道の利用者がなくなり、昭和30年頃には一時消滅した。

その後、対岸の耕作の便を図るため、洪水時には橋板を取り外せる簡易な橋が設けられた。蔓畝街道は秋葉街道の地藏堂角が起点である。



太田川堤防から蔓畝街道(大尾山街道)へ100m程上がると、「阿佐姫塚」がある。

約400年前、天方城に阿佐姫という姫が、悪い病気にかかってしまった際、「私の病気はもうよくならないが、病になった女性の身を私が守りたい」と自ら命を絶った。阿佐姫が葬られた塚は、いつからか「阿佐姫大明神」として祀られ、女性が多く参拝するようになったと伝わる。



秋葉街道は、地藏堂から北へ元開橋に向かって進む。

<参考> 天方城 (天方新城)

今川方国人領主天方通季の孫、通興は新城を築いて防備を固め、永禄12年(1569)徳川家康軍と戦ったが降伏し、徳川の支配下に入った。その後、武田軍の進撃により降伏。天正2年(1574)再び徳川軍に攻められ降伏した。子の通綱の後、通直の時に廃城となった。現在は城ヶ平公園として整備されている。城跡は外堀・内堀や主郭がよく残っている。大手道は通行止めとなっている。





秋葉街道は太田川の支流となる三倉川の元開橋を渡って大鳥居に入る。大鳥居の地名は、秋葉山の二の鳥居があったことに由来するという。

36 道標

元開橋を渡って左折する街道の角に道標がある。自然石に「右 吉川 左 秋葉道」と刻まれている。



No. 36



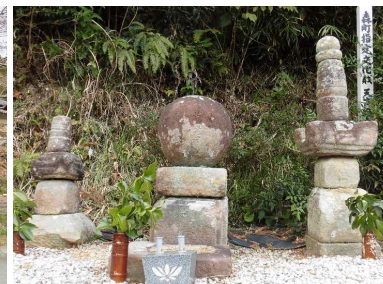
No. 37

37 道標

もう一基は、交番のすぐ北側の道の角にある。自然石の正面に「右 吉川道ニ通ズ」、裏面に「天方村大鳥居青年團 大正十四年一月□□」と刻まれている。

38 蔵雲院

松 巖 山蔵雲院は、文亀元年（1501）天方山城守通 季が、飯田山崇信寺5世助 岑 祥 佐和尚を請じて開山したと伝えられる。現在の本堂は延享5年（1748）の建立である。本堂外陣天井は丹を塗った美しい天井である。



境内に天方氏の三代の墓がある。中央が通季の卵塔と伝えられる。現在の墓所に移る前は、蔵雲院の出先にある川端に石塔が並んでいたという。

<参考> 天方本城

大鳥居にある天方本城は、天方初代通秀が築いたという。文亀元年（1501）5代通季は今川方として城を守り、斯波・小笠原連合軍と戦った。一時、城を奪われたが、奪還した。その後、堅固な城の必要性から、白山城を築城した。さらに通季の孫通興の時、天方新城を築城した。

39 道標

秋葉街道より葛布の滝への分岐点にある。正面に「右 大洞院 葛布滝道」、左面に「寄附者 三河国平□□ □山三郎」と刻まれる。（下の写真）

40 秋葉山常夜燈・道標

（秋葉山常夜燈は森町指定文化財）

秋葉山常夜燈は、天保年間（1830～44）に黒石村の人々によって建てられた。同地の大工源右衛門の手による鞘堂である。元々は、500m程北の田の傍らにあり、さらに県道脇に移され、その後現在地に移された。重厚で優美な造りである。中に木製の燭台杭がある。



No. 39



No. 40

傍らに道標がある。正面に「秋葉道□□（四里）」、右面に「江戸建立講中」と刻まれる。

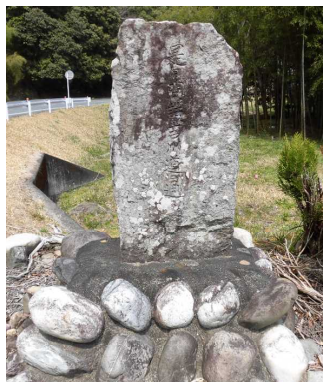


—— 田中元二氏による道筋

黒石の集落は、三倉川の西の山麓づたいにあり、古い道筋がある。

4 1 道標

石積みの台座の上に道標がある。正面に「是ヨリ問詰吉川道ニ通ス」、裏面に「大正十三年一月 御成婚記念 黒石青年團建之」と刻まれる。また、台座裏には、「平成元年七月」とあり、台座は新しく作られたものである。



西俣に入った所の「谷の沢橋」の左手(西)に水準点がある。水準点の左(西側)に古い道があり、北側へ進み再び県道に出ている。

田中元二氏によると、西俣に入った所から、三倉川の対岸の八坂八幡神社へ進む道も古い道筋という。



4 2 秋葉山常夜燈

鞘堂は瓦葺き切妻造りで中に2つの新旧の鉄製燭台が杭の上に置かれている。

また、2つの棟札が掲げられ、古い方は「天保五年三月吉日(1834)遠州周智郡西俣村」、新しい方は現在の鞘堂のもので「平成十三年三月吉日」と記されている。



4 3 渡辺清彦博士誕生の地

植物学者の渡辺清彦は、明治33年に森町西俣に生まれた。東京帝国大学に学び、旧制広島高等学校の教授となり、マレーシアのペナン植物園の園長として派遣された。戦後、静岡大学・千葉大学の教授などを勤めた。「図説熱帯植物集成」などを出版した。

庭のマロニエは、東大農学部で育てた苗を、1976年頃、家族と植樹したものである。





——「塩の道ウォーキング」による道筋

要橋を渡ると、川が山に迫り、街道は山づたいに進んでいたと思われる。

44 一本杉の掘割

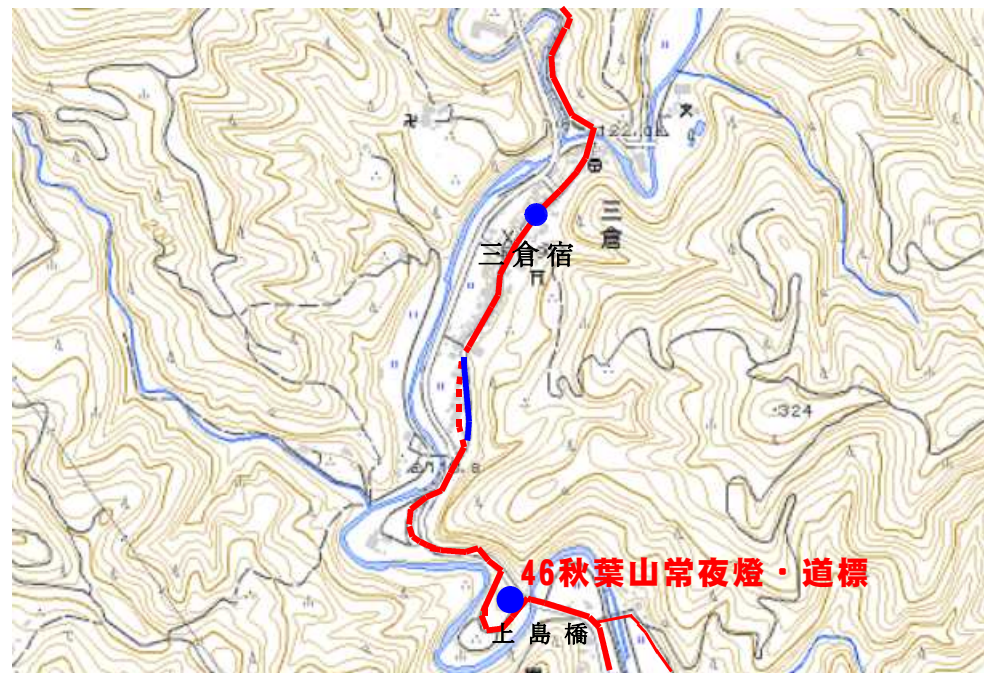
明治になって、山を掘り割り道を通す工事を行ったが、難工事で3名が犠牲になったという。ここに一本の杉の大木があったが、伐採された。



45 黒田観音堂

宝珠寺の境内に観音堂がある。万延元年（1860）三倉村黒田の堺屋八右衛門が、悪病退散、子供たちの成長を祈願して創建した。観音像を主柱として西国三十三観音の石像を祀っている。現在の観音堂は昭和62年に改築。

堺屋の三浦家は、江戸時代に街道沿いで宿屋を営んでいた。堂内には名物の鶯餅を搗いた石臼が残されている。三浦家は参道のすぐ北側にある。



46 秋葉山常夜燈・道標

上島橋を渡った所に、秋葉山常夜燈と道標がある。

石造りの常夜燈は「秋葉山常夜燈」「明治廿六年六月五日建立」とある。

常夜燈の前の道標は「秋葉道五里」「江戸建立講中」と刻まれている。掛川から5里目にあたる。

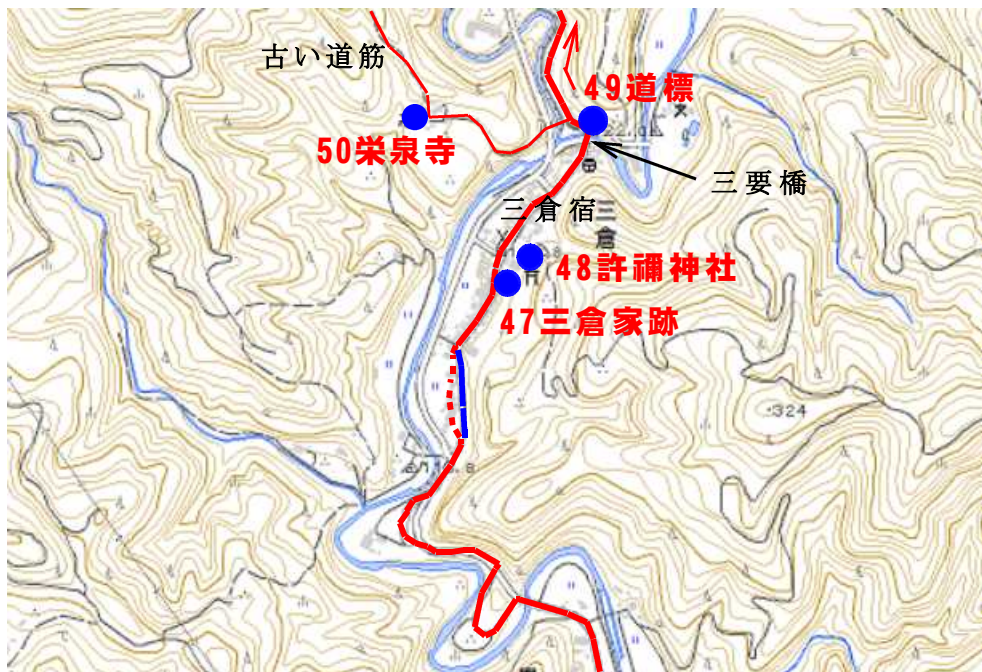


秋葉街道は三倉宿に入る。三倉は、古くから北遠地方と森・川根方面などを結ぶ交通の要衝として発達した。問屋場・旅籠・茶屋などが営まれ、秋葉山参詣者を初めとする旅人の往来・宿泊によって繁栄した。「鶯餅」は茶屋の名物であった。

明治17年の火災で町並みの大半が焼失した。

明治中頃に、旅籠に白木屋・常磐屋・柏屋・かぢ屋、茶屋に小松屋・枡屋・菊屋、他にも屋号を持つ家々が軒を並べていた。





47 三倉家屋敷跡

許禰神社の南に、三倉久右衛門の屋敷跡があり、言い伝えがある。

徳川家康が武田方天野氏との戦いに敗れ、三倉に逃げてきた時、久右衛門が家康を隠し無事に助けた。家康は天下を取ったら褒美を与えると約束し、天下を取った後に、久右衛門に屋敷の門先から見渡せるだけの土地を与えるとの朱印状を下付したという。



48 許禰神社

延喜式（927年）に記載される古社である。もとは木根棚指村の氏神であったが、大正4年に現在地に遷座した。境内に樹齢推定200年の棕の木がある。

参道横には、秋葉山常夜燈がある。「秋葉山常夜燈」「明治廿六年癸巳六月建立」「村中安全」「世話人 寺沢茂吉 矢部平吉」と刻まれている。



49 道標2基

三要橋を渡った所に2基の道標がある。ここは秋葉街道から大日山・春埜山への分岐点である。

右手の道標は、正面に「(種子) 従は大日山三里」、右面に「為威験 増進一山口□□」、左面に「遠江国豊田郡 諸人所願 □□」とある。

左の道標は、正面に「右 春埜山道 従は三里」、裏面に「明治十二年十月日 周知郡向末本邸 建主 高橋萬平」と刻まれる。

近くに岩切観音堂がある。



50 栄泉寺

寺伝によると、龍頭山栄泉寺が中村尺平にあった時代の天正2年（1574）戦いに敗れた徳川家康が栄泉寺で傷の療養をし、2年後に再び戦いに立った家康が戦勝祈願を当寺で行った。慶長9年、征夷大將軍になった家康が栄泉寺に「天下和平災害不生 過乱」の直筆短冊を贈り、徳川家の三つ葉葵を寺紋とすることを許し十萬石格式の朱印書を渡した。

三倉に移転した時、徳川光圀が使わした東皐心越禅師が「太平山」の扁額、聯一對を揮毫した。これにより山号を「太平山」と改めたという。

現在の本堂は、元禄9年（1696）の建築で、森町において判明する最古の寺院建物である。



秋葉街道は、古くは栄泉寺の参道を上がり、寺の東から半明を通り大久保に向かう道筋があったが、この案内は、三倉川に沿って一ノ瀬・大久保へ向かう道筋を紹介する。



こよは山道を案内して無事に逃がしたが、天野方の兵に厳しい追及を受け、命を絶った。人々はその死を悼み、その土地を嫁田と名付け、弁天様を祀って供養をした。傍らの松をおこよの松と呼んだという。現在、松は上半分が切られている。

秋葉街道は一ノ瀬に至る。道は三倉川と交差し、瀬となっていて、簡単な木橋を渡ったり歩いて渡ったりしていた。一ノ瀬はこの地域の最も上流の瀬で、一ノ瀬と呼ばれた。少し下流には、二ノ瀬・三ノ瀬がある。三倉川全体では多くの瀬があり、「四十八瀬川」あるいは「いろは川」と別称された。

5 1 秋葉山常夜燈

永代橋の手前右にある石造りの常夜燈で、「秋葉山」「献燈」「国家安全」「大正四年正月建之」「大正御即位紀念」「寄付者 大石平吉」と刻まれている。

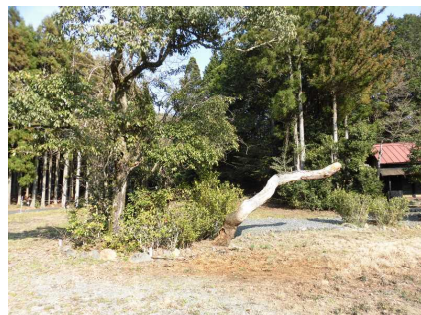
秋葉山常夜燈がある所から、街道は山沿いの道となり、上り下りがある。



5 2 おこよの松の伝説

天正2年(1574)天野氏の犬居城攻めをして撤退をした家康軍が、天野軍の追撃を受けて、多くの武将が命を落とした。その時、この付近の小高い山に三つ葉葵の旗を立てた。その後家康の天下になると、この山を「天下山」というようになった。

また、撤退する徳川方の武士が、土地の嫁であったおこよに助けを求めた。お

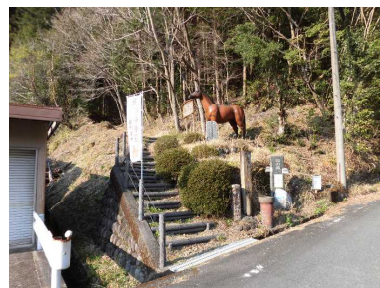




一ノ瀬からは坂を登り、尾根づたいに進む道となる。

秋葉街道の登り口は、一ノ瀬橋付近からほぼ真っ直ぐ登る道筋であるが、途中から崩れ・ブッシュなどで通行は不能となっている。

迂回路として現在は、少し右手に登り口がある。(馬のモニュメントがある。)**「戦国夢街道」**と名付けられたハイキング道となっている。



53 七人塚・鶉殿澁

うどのぶち

長月寺一ノ瀬霊園の裏の高台に、七人塚の碑がある。天正2年(1574)の犬居城攻めで撤退した徳川軍の多くの武将が命を落とした。鶉殿藤五郎・堀平八郎・堀小太郎・小原金内・大久保勘七郎・玉井善太郎等20余人という。土地の人々は将兵たちの亡骸を葬り「七人塚」とよんで供養した。

鶉殿藤五郎は、この一ノ瀬の地で討ち死にしたという。この一ノ瀬の澁を「鶉殿澁」と呼んでいる。



54 地蔵道標

一ノ瀬から登って村道に出た所に、地蔵があり、道標の役目を担っている。台座から光背まで一つの石材から彫り出されている。光背右に「六才講中村道」、光背左に「あきは道」、台座に「乙丸村」と刻まれている。一部が補修されている。もとは、少し西で一ノ瀬から真っ直ぐ登った村道との交差点にあったものと思われる。



55 万歳坂

徳川軍との戦いで、追撃をして優勢となった天野軍が、この付近で勝ちどきをあげたので、ここを万歳坂とよぶようになったと言われている。この付近には、高札場があったという。村の子供たちは秋葉道者を追いかけてながら「道者道者一文銭おくれ。くれる道者は米道者、くれぬ道者は糠(ぬか)道者」とはやし、万歳坂を上り、花立の茶屋まで後を追ったという。

56 花立の茶屋

花立家は、明治初年まで馬による生活物資の輸送などを家業とし、茶屋も営んでいた。花立姓の由来は、この家の前にはいつもいろいろな花が咲いていて、時の代官が感心し花立姓を与えたという。元禄4年には苗字帯刀を許され、当主は花立孫四郎を名乗った。



57 阿弥陀道標

秋葉道と光明山道との分岐点に建てられていた阿弥陀如来像で道標の役目を担っている。花立茶屋の西横に建てられている。

台座から光背まで一つの石材から彫り出されている。光背の右に「右 あきは」、光背の左に「左 光明山」、台座に「乙丸村」と刻まれている。

後に、土地の人々は「いぼとり地蔵」と崇め、松ぼっくりを糸に連ねて願いをかけ供えてきた。



街道は、西側の休憩所から整備され、石畳の道となっている。



石畳の道に入る手前の右に旧道があるが、不通となっている。

58 馬墓地

説明板によると、この森が「馬墓地」と呼ばれる由縁は、戦国時代に徳川と武田の戦いでは多くの将兵だけでなく馬も多く倒れた。その時、馬をここに葬ったのが初めと言われている。

その後も馬は陸上交通の主役であり、江戸時代、明治、大正、昭和の初めまでは、この森は公認の馬の墓場であった。牛車をひいた牛も葬ったことがあるという。馬墓地は人間と馬との長い間の結びつきを表している。

石畳の道から県道に出て、県道を少し進むと樹齢350年の梅の大木がある。

その少し先にある左手の細道入る。



59 地蔵森

昔から村の人々は、この地蔵を敬い、この辺りを地蔵森と呼んでいた。祀られた時期は、言い伝えではおよそ300年前の元禄のころとも言われている。この地蔵森の地蔵は穴のあいた石を供えて耳の病気平癒の願掛けをすると、御利益があるとされ、また子供を育て飢餓を救うとも言われている。盂蘭盆の供養もしている。



地蔵森を過ぎ、柿の木の角を右折して進む。途中「権現森と霧吹谷」の説明板がある。坂を上った所から、右手に細道があり、八幡神社まで向かう。

60 八幡神社

大久保の八幡宮は、南北朝期に鎮祭されていたようで、覆い屋内の現存本殿は、天文21年(1552)に再建された。静岡県内では、奥山方広寺の七尊菩薩堂に次ぐ古い建物である。江戸前期の貞享元年(1684)に改修があったが、往時の部材が確認される。屋根は大和葺きという古様式を用いている。全体に丹を施し、向拝柱は面取りが深い角柱で、宝珠や雲形文様が線描される等、華麗な建物であった。県指定文化財。

神社前には、タブノキなどの大木がある。



61 矢塚

矢塚と言われる辺りは、天正のころ徳川軍と天野軍が戦った古戦場であり、矢塚には徳川方の武者が祀られていると言われているが、その名は不明である。殿軍を引き受けたのは、大久保忠世であり、弟の大久保勘七郎は、この地で戦死したと言われている。若干24歳(掛川誌稿)であった。

後世、この村を大久保と呼ぶようになったと伝えられている。





6 2 うぐいす茶屋

三倉の名物うぐいす餅について逸話がある。戦国時代の末頃、一人の武士が一軒の茶屋に腰をおろした。茶屋の婆さんは茶の後に京菜と大豆をつぶしてまぶした餅を出した。武士はそのおいしさを褒め、形も色もうぐいすにそっくりだから、うぐいす餅と名付けたらよいと言いつつ秋葉を指して立ち去った。それが山中鹿之助であった。それから後、うぐいす餅は三倉の名物となり、その茶屋は「うぐいす屋」と呼ばれ、大正時代まで続いたという。



6 3 若杉家屋敷跡

室町時代の終わり頃、秋葉街道と百古里街道が交差するこの辺り、山田家があり、武田方の山本勘助が一夜の宿を借りた折、家の主人に商いをするを勧めたという。山田家では、三丸山の湧き水を利用して酒造りをし「若杉」と名付けて商った。この酒が有名になり、若杉が屋号となった。



秋葉街道は、若杉家屋敷跡からしばらく進み、県道から分かれて左手の山道に入る。

6 4 板妻の里

この辺りは、昔から板妻の里と言われた。山村の此の村は杣そまや木挽きを生業とする男達が多く、切り出された角材や板は各方面に売られていった。女性たちも木材加工の手伝いや運搬の担い手となり、板を干したり運んだりした。

当時、大久保の若杉商店がこの材料を買い取り商いをした。板を背負う妻たちの姿を見て、誰言うもなく板妻の里という言葉になったと言われている。

6 5 道標

掛川より7里目にあたる道標で、四角柱の正面に「秋葉道七里」、左面に「江戸建立講中」と刻まれている。

昔から人々の信仰は、各種の災難から免れることを神仏に祈るものであった。特に江戸の大火が何回もあり、江戸の人々へ火難の恐ろしさを知らしめ、火坊の秋葉山への信仰が盛んになった。また、水難除けの光明山への参拝と合わせて、街道は賑わった。



6 6 旅籠信濃屋

江戸時代の中頃、信州出身の海産物を扱う商人が、この街道沿いに旅籠屋を開き、その屋号を出身地にちなんで「信濃屋」と名付けた。旅人を泊めるだけでなく、五六頭の馬を飼い、旅人の運搬もした。大正の初め頃まで続いていた。





小沢の宿は、森の町と秋葉山を結ぶ中間点にあり、また、大日山や春埜山への分岐点であることから山間の宿が営まれた要因になったという。

67 道標

大小2基の道標がある。

小さい道標は、正面に「右 防山春埜山 左 犬居秋葉山道」、右面に「学制発布 五十年紀念」、左面に「静修支部」と刻まれている。明治5年学制が発布されて、50年(大正11年)を記念して青年団静修支部が建てたものである。

大きい道標は新しく建てられたもので、「右 舟場二千四百米」「左 秋葉山方面」と刻まれている。

(左手の街道を進み、浜松市天竜区に入る。)



68 大日山道標

秋葉街道から大日山への分岐点、小奈良安の入り口に建てられている。高さ125cmの立派な太い道標である。3つに折れているが、修復されている。正面に「従は大日道」、左面に「霊是山金剛院」、右面に「安永(癸巳)」(1773)、裏面に「當國豊田郡船明邑 石工森川伊右衛門吉英」と刻まれている。



69 旅籠野口屋跡

街道の右手に小奈良安の野口屋があった。現在作業小屋が建てられている。山中の数少ない旅籠の一つで、昭和の初め頃まで宿屋として営業していた。

道の左の松下家でも明治の初め頃まで、旅人を泊めることがあったという。

松下家北隣も平野屋という宿屋であった。



70 秋葉山常夜燈

正面に「秋葉山 獻燈 小奈良區安全」裏面は「明治四十三年建設」と刻まれている。左手少し先には、秋葉山三尺坊大権現禰宜を勤めた旧家の羽入家がある。

秋葉街道は、常夜燈のすぐ先の分岐点を右手に進む。



71 地藏道標

意昌庵(紅葉寺)参道右手の紅葉が多く植えられている山側に地藏が安置されている。光背の左側に「左 秋葉山道」と刻まれている。寛永年間の作という。

意昌庵は紅葉で知られる曹洞宗の寺で、愛染明王霊場である。ヤマザクラの古木やサルスベリの名木がある。

意昌庵の前は、旧犬居小学校の静修分校の跡で、昭和41年に閉鎖された。

小奈良安は古い地名であるが、明治初めの静修学校の時から呼ばれている静修が新しい地名となった。





72 道標

「学制発布五十年記念」として「静修支部」が建立した道標である。「右 犬居秋葉山道 左 秋葉山近道」と刻まれている。

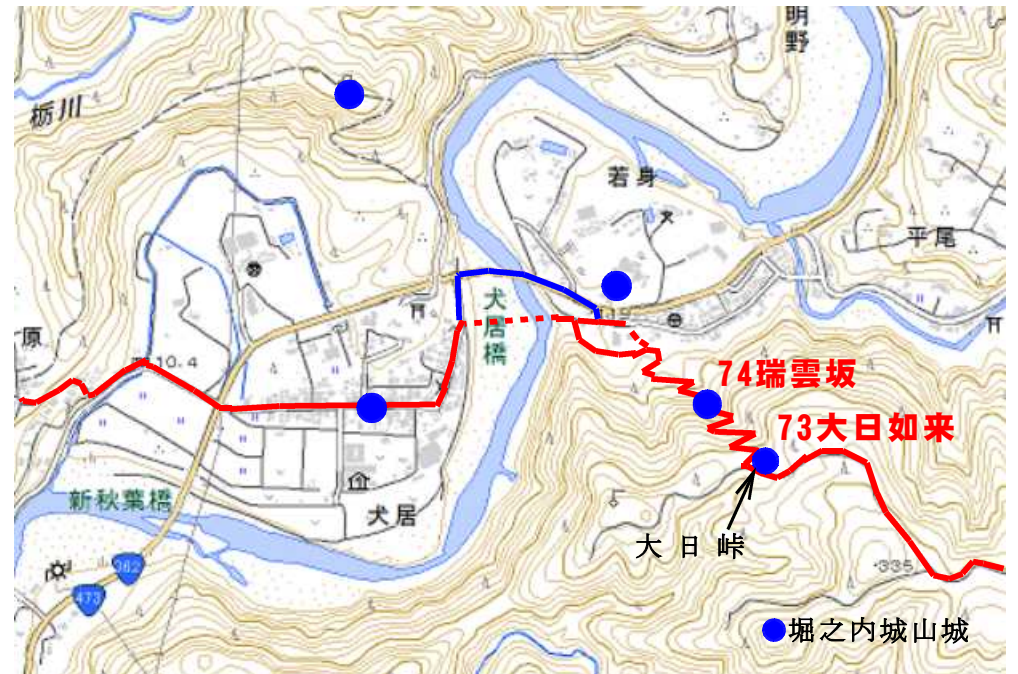
この付近からほぼ平坦な道が続く。

NHK中継所の案内表示があり、そのまま真っ直ぐ進む。



さらに進むと分岐点に、堀之内城山ハイキングコース(左)の表示があるが、そのまま真っ直ぐ進む。

堀之内城山城は、天野氏の犬居城から約1.5kmの位置にあり、天正4年(1576)徳川家康の犬居城攻めの本陣に使われたと考えられている。山頂の本曲輪を中心に尾根づたいに曲輪や堀切、塹堀などが見られる。



73 大日如来

秋葉街道の大日峠道脇に安置されている。新しい堂宇が平成28年12月に建設された。智拳印を結ぶ大日如来は、蓮華座に「願主 現秋葉寺□□(卅八カ) 世任超叟」「宝曆二壬申十二月吉日」(1752)と刻まれている。台座を含み高さ85cmである。耳の病に御利益があるという。

峠には2~3軒の茶屋があり、秋葉山を一望する景勝地であったという。

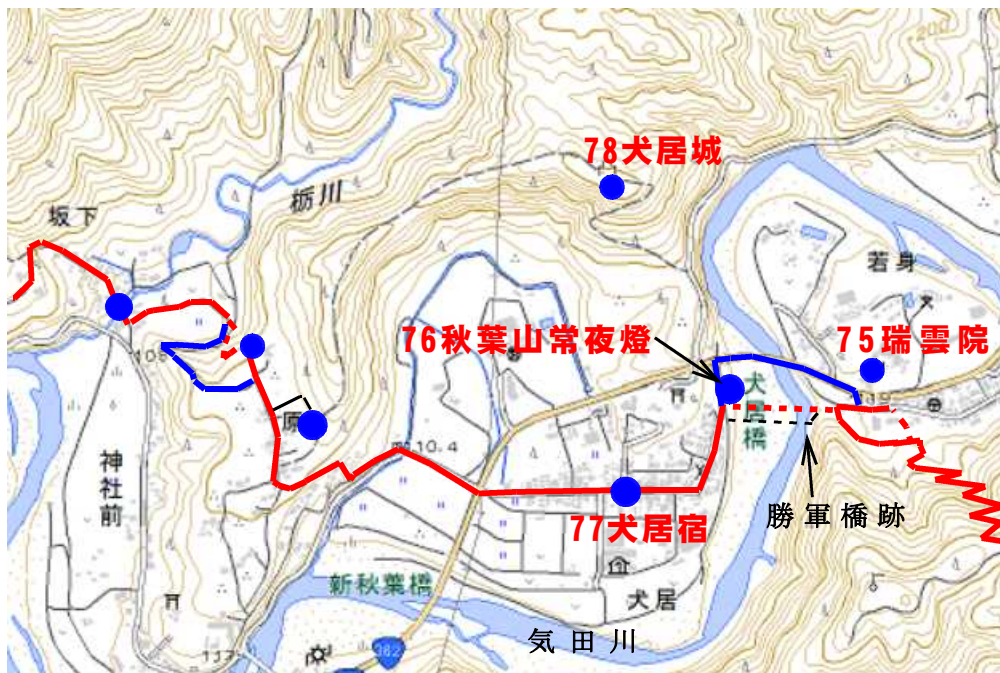


74 瑞雲坂

秋葉街道は、大日如来像の西横から瑞雲坂を若身へと下る。勾配が急なくつものつづら折れの坂道である。坂の名は、向かいの瑞雲院の寺号に因んで付けられたものといわれる。

徳川家康は、大日峠で犬居城を見て戦略を練り、瑞雲坂を駆け下りて、瑞雲院に陣を構えたという(三河物語)。





秋葉街道は、瑞雲坂から気田川の渡船場に至る。すぐ近くには、「勝軍橋」跡の石垣が残っている。明治39年日露戦争の戦勝記念として名付けられた。



76 秋葉山常夜燈

気田川の渡船場付近に建てられた常夜灯である。川原石で積み上げられた土台の上に載せられている。竿部分に「秋葉山常夜燈」「弘化五戊申年□□」（1848）「村中安全」と刻まれている。



77 犬居宿

犬居は、二俣・森方面と北遠・南信地方などを結ぶ交通の要衝で、中世、天野氏配下のもとに市場が営まれた。江戸時代文化年間には14～5軒の旅籠が建ち並び、秋葉山参詣者の宿泊で賑わった。しかし、浜松からの道筋の旅籠の隆盛により、客足が減り、半減・衰退していった。



78 犬居城

天野遠景を祖とする天野氏は、室町期以降国人領主として犬居城を拠点として成長した。文亀元年（1501）前後、今川配下となり、支城網を構築し領国支配を完全なものにしていったが、今川義元の死後、永禄末年（1570）には遠江侵略を向う武田の支配下に組み込まれていった。犬居城も武田流の改修が行われ、空堀や横堀が配された。



天野氏は武田信玄の遠江侵攻の先導を勤めたが、信玄病没や長篠合戦後、徳川家康の天野氏への攻略により、犬居城を放棄し、信濃へ落ち延びていった。

（県指定史跡）

75 瑞雲院

永正2年（1505）賢窓常俊を開山とし、天野景頭が堂宇を建立して開基となった。元の境内は現在よりも東方にあり、天野家の墓所も現在の場所に移設された。

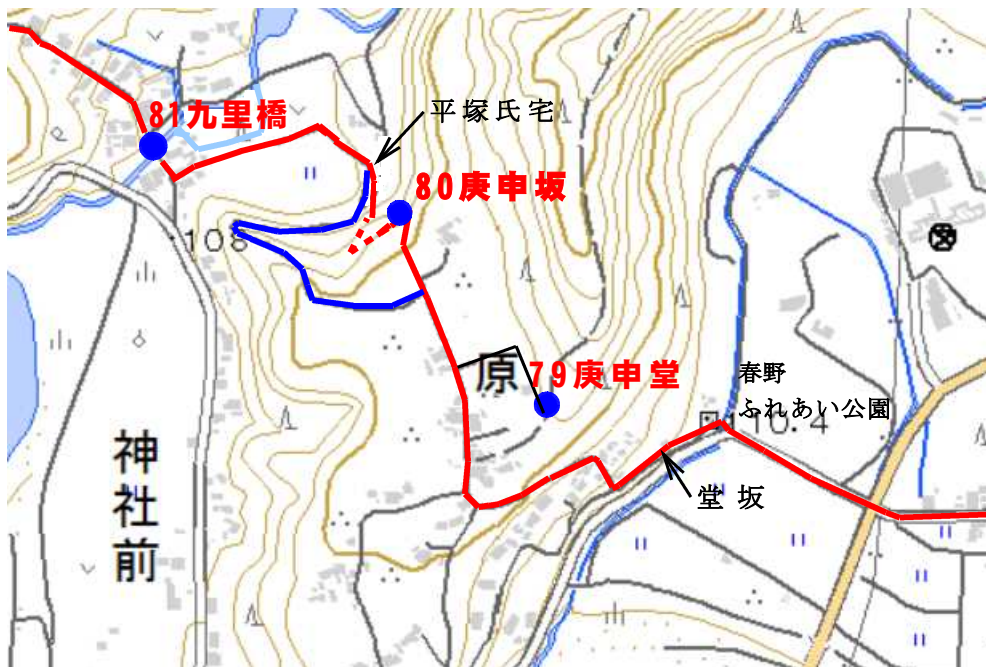
境内には山門、鐘楼、イヌマキなどの文化財がある。山門は寛延3年（1750）の建立で、北遠地方の曹洞宗寺院では、楼門形式の山門は極めて珍しく貴重である。



境内には、秋葉山常夜燈が移されている。元は瑞雲坂登り口の小沢家の門前に、明治終わりか大正初め頃までであった。

柱の正面に「右 かけ川道」、右面に「左 けた道」、左面に「左 あきは道」、裏面に「寛政二庚戌正月吉日」（1790）と刻まれている。火袋は補修されている。





(原の拡大地図)

秋葉街道は、犬居宿より春野ふれあい公園の前を進んで堂坂を上り、右折して細道の急坂を上り原地区に至る。

原の中ほどに以前に葉倉屋という旅籠があったが、今は茶畑となっている。

79 庚申堂

元は庚申坂の途中にあった庚申堂は、平成17年に稲荷神社の鳥居横に移された。青面金剛童子像が祀られている。長生きを願い、五穀豊穡を願う日待ちを行っていたという。



少し先にある庚申坂の名は、庚申像が祀られていたところから付けられた。

80 庚申坂

秋葉街道の庚申坂は元の庚申堂跡付近まで通行できるが、その先は崩れとブッシュがあり、通行不能である。

坂の手前の角を左折して迂回して下る。坂の下出口付近は、道がしっかり残っている。平塚氏宅前に入る。



庚申坂の入り口

右手に元の庚申堂

坂の下の出口

81 九里橋

坂下の入り口の栃川に架かる九里橋は、掛川・浜松からともに九里目の距離にあたることから名付けられたといわれ、秋葉山坂下口参道50町の起点となっている。

かつての木橋は昭和16年夏の洪水で流失、現在は同38年竣工した橋になっている。

九里橋のすぐ手前左側に、昭和12年5月に津市岩田秋葉講が建てた「至神社従是三十八丁」の石柱がある。参道途中には他に「三十丁」「二十丁」「十丁」が建てられている。



以下、九里橋より秋葉山までの案内は、

「秋葉街道案内資料Ⅱ」P17～22

に記載されている資料を掲載する。